

——演奏される前の音楽を、聴いたことがありますか。

いつも皆さんが聴かれる音楽は、ぴかぴかに磨き上げられて、開演ブザーを待っています。
では、演奏会が始まる前、お客さんのいない舞台にはどんな時間が流れているのでしょうか？

今回の企画は、公開リハーサルです。普段は見ることのできない舞台裏、聴くことのできない耳に届く前の音楽をこっそり見学するようなプログラムです。指揮者と奏者が舞台に上がってから、ひとりひとりの音を合わせ、息を合わせて磨き上げ、いざ、本番……！皆さんの耳に音楽が届くまでの時間を、その緊張感や熱量を、音楽家になったような気持ちで、（もちろんこっそり覗きにきたお客さんの気持ちのままで）体感するように楽しんでいただけたら幸いです。

そもそも、オーケストラってなんでしょう。どんな楽器があるのでしょうか。それぞれの楽器の音色は？初めて音楽に触れる人にも、もう演奏を聴き慣れた人にも、指揮者や奏者の姿を通して、ほんの少し解説を添えて、もう一步、音楽と親しくなれるような、面白い時間になればと考えています。

2008年に初訪問の長崎の地でキャリアをスタートし、今や世界の女性指揮者の頂点に立つオクサーナ・リーニフさんによるベートーヴェンの名曲『交響曲第7番』をぜひ、お楽しみに。

出演者紹介



オクサーナ・リーニフ（指揮）

1978年、ウクライナのリヴィウ州ブロディ市に生まれる。

2004年、パンベルク交響楽団主催『グスタフ・マーラー指揮者コンクール』で3位入賞。

2008年7月、ドレーズデン音楽院の学生時に初来日し、長崎市、五島列島を訪問。ここから彼女の指揮者としてのキャリアが始まる。グラバー園でブッチーニ像と、蝶々夫人を歌った三浦環像を見て、ブッチーニに傾倒して行った。

2013年よりミュンヘンのバイエルン国立劇場でキリル・ペトレンコ氏（現在ベルリンフィルの音楽監督）のアシスタント指揮者として研鑽を積み、

2016年にはウクライナの優秀な若手音楽家を集めて青少年交響楽団を創立。（現在はウクライナを避け、ヨーロッパ各地で公演活動を実施し、次世代のウクライナの文化を守る青少年が徴兵されないように支援している）

2017年、オーストリアのグラーツ歌劇場の音楽監督に就任。

2021年、バイロイト音楽祭で史上初の女性指揮者としてワーグナーの『さまよえるオランダ人』を指揮し、一気に世界中の音楽ファンの注目を浴びる。

2022年、イタリアの三大歌劇場に挙げられるボローニャ歌劇場の女性初の音楽監督に就任。

2023年11月、来日オペラ公演を果たし、ブッチーニの『トスカ』を上演。

2025年2月、ウィーンフィルを指揮することが決定。

2025年4月、東京でブッチーニのオペラ『蝶々夫人』を指揮する予定。



※今回のチャリティーはすべて、彼女の設立した青少年交響楽団への直接の支援となります。

友好音楽祭オーケストラ

2017年に、東京大学・早稲田大学・慶應義塾大学・青山学院大学の現役、卒業生が中心となって設立した、都内のアマチュア奏者が集うオーケストラ。世界的に活躍する奏者をソリストに迎えてチャリティーコンサートを開催し、国際交流とチャリティーの推進を図っている。

これまでにダニエル・ゲーデ（ウィーンフィルの元コンサートマスター）、タマーシュ・ヴァルガ（ウィーンフィル首席ソロチェロ奏者）、フィリップ・ベルノルト（パリ国立高等音楽院のフルート科・室内楽教授）、カールハインツ・シュッツ（ウィーンフィルのソロフルート奏者）、ペーター・シュミードル（ウィーンフィルの元ソロクラリネット奏者）、クシシュトフ・ポロネク（ベルリンフィルのコンサートマスター）ほかベルリンフィルの多くの奏者達と共演を重ねる。

